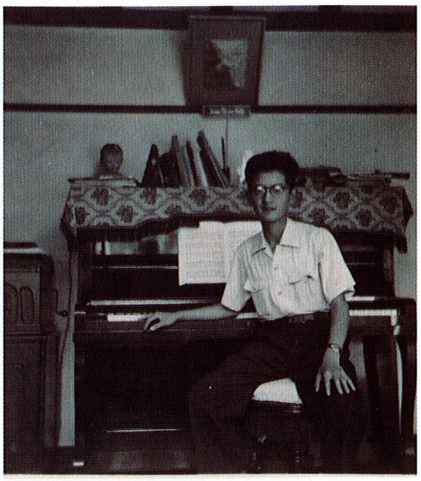
秋山和慶

第3回 音楽といたずら三昧の高校生活

人生は各駅停車で



ピアノとホルンを練習しながら、オーケストラができる喜びでいっぱいだった高校時代。

連載第1回でお話ししたように、中学生の僕は、桐朋学園のオーケストラに本当に衝撃を受けました。僕のピアノの先生は芸大教授の豊増昇先生でしたから、ピアノで芸大の附属高校に入れと言われていましたが、オーケストラをやりたい、そのために桐朋に行きたい、という思いは日増しに強くなったのです。その思いを先生に伝えると理解を示してくださり、それなら、と桐朋の井口基成先生を紹介してくださいました。

井口先生のレッスンに通うようになると、ピアノしかできない僕でもオーケストラをやる方法はないか井口先生に尋ねたり、桐朋の大学生だった小澤征爾さんの演奏会に行っては、桐朋に潜り込む方法を小澤さんに聞いたり。そうしたら、中学3年の夏休みに小澤さんから「○月△日に学校に顔を出せ」と言われ、行くとそこいらしたのは齋藤秀雄先生でした。「小澤から聞いたけれど、君は指揮をやりたいんだって？　小澤のあとは誰も指揮者がいないからちょうどいい。やってみるか」と。僕は指揮の「し」の字も言ったことないのに！　でもこうして指揮を勉強することになったのです。まずは学校に入らねば、ということで桐朋の高校へはピアノ科で入学し、同時に指揮のレッスンを始めました。さらにオーケストラの中で演奏するために千葉馨先生にホルンを、岩城宏之さんに打楽器を習って。高校と大学で計7年間、ラッパ吹いて太鼓叩いて棒振って、という生活でした。

高校時代は音楽だけでなく、よくいたずらもしました。当時『いたずらの天才』という本に書いてあった他愛のないたずらを片っ端からみんなでやったんです。財布に長い紐をつけて道端に置くとか、駅のベンチにニスを塗る、とか。学校では、クラリネットの北爪利世先生の愛車をみんなで担いで、学校の正面玄関のガラス張りのロビーに置いて。学校の小使いさんに怒られオロオロする先生の姿を見て、僕らは陰で笑いころげていました。また、桐朋の普通科は女子高ですから、女の園に入ってきた音楽科の男は普通科の一部先生からは目の敵にされていました。特に家庭科の女の先生は怖くて、どんなに真面目に授業を受けても音楽科の男の子は落第点。それが悔しくて、教室の扉の上に水を入れたバケツを仕掛けたり。そんないたずらを音楽科の先生は怒ることなく大笑いして見ていました。

当時は学校の周りには畑や野原や小川があり、天気のいい日は授業をつぶしてクラス全員でよく散歩に行きました。野原で車座になって、先生の留学中の体験談や、外国の様子など、まだ見ぬ遠いヨーロッパの国々に想いを馳せたりしていました。演奏に関しては齋藤先生が厳しく指導していましたが、ほかの先生の授業はガス抜き。大らかな雰囲気で実にのんびりした自由な学校でした。昭和31年頃のお話です。（談）

©川村悦生

秋山和慶

1941年生まれ。64年2月に東京交響楽団を指揮してデビューののち音楽監督・常任指揮者を40年間務める。東京交響楽団桂冠指揮者、ミューザ川崎シンフォニーホール・チーフアドバイザー。